【4】後期原始仏教聖典の「螺髻梵志」資料

［0］ここでは後期原始仏教聖典の螺髻梵志資料を紹介する。ここで「後期原始仏教聖典」として紹介するものは、*KN.*に含まれる *Apadāna*、*Buddhavaṃsa*、*Cullaniddesa*、*Jātaka* と『根本有部律』であって、*Jātaka* に関しては偈の部分は〈偈〉として、散文部分とは区別した。

［1］後期原始仏教聖典の螺髻梵志資料を紹介する。

〈1〉私（舎利弗）は前世において、スルチ（Suruci）という螺髻（jaṭila）の苦行者であり、雪山の近くのランバカ（Lambaka）という山の森の中にアーシュラマ（assama）があり、そこに草庵（paṇṇasālā）を作って住んでいた。

私には２万４千人の弟子があって全てバラモンで、相（lakkhaṇa）、古伝説（itihāsa）、語彙（sanighaṇḍu）や儀軌（sakeṭubha）、詩句（padaka）や文法（veyyākaraṇa）、妙法（saddhamma）において究竟に達しており（pāraminġata）、吉凶占い（uppāda）や占相（nimitta）や観相（lakkhaṇa）を熟知し、真言（mantapada）を誦していた。彼らは前と後に１カーリの荷物を持ち（purato khāriṃ pacchato ca vajanti）、鹿皮の上衣を着（ajinuttaravāsin）、朝夕に沐浴して清らかとなることを喜び（udakarohakā keci sāyaṃ pāto suciratā）、爪も腋毛も伸びて（parūḷha-kacchā-nakha-loma）、歯は汚れ（paṅkadanta）、頭も汚れていた（rajassira）。

アノーマダッシー仏が来られたので、私は制約のない不死の境地の涅槃を求めて（asaṅkhataṃ gavesanto nibbānaṃ amataṃ padaṃ）500〔の黄金〕を撒布して（abbhokiṇṇaṃ pañcasataṃ）仙人として出家し（pabbajiṃ isipabbajjaṃ）、神通において究竟を得て梵天界に行った（ahaṃ abhiññāpāramiṃ gantvā brahmalokaṃ agacch' ahaṃ）。*Apadāna* 003-001-001（p.015）

〈2〉須菩提は前世において出家した（貪欲が生じたら在家者 āgārika になる、と言っている）コーシヤ（Kosiya）という厳しい苦行者（uggatāpana）の螺髻にした者（jaṭila）で、雪山から遠くないニサバ（Nisabha）という山の森の中のアーシュラマ（assama）の草庵（paṇṇasālā）に住んでいた。果実も根も葉も食べることなく（phalaṃ mūlaṃ ca paṇṇañ ca na bhuñjāmi）、転がる黄色の葉で生きていた（pavattapaṇḍupattāhaṃ upajīvāmi）。*Apadāna* 03-03-021（p.067）

〈3〉その時私〔Dhammasavaniya〕は螺髻にした（jaṭila）厳しい苦行者（uggatāpana）であった。樹皮の衣（vākacīra）をなびかせて空の上を行き、仏に無常の教えを聞いてアーシュラマ（assama）に一生を過ごした。*Apadāna* 003-034-336（p.273）

〈4〉螺髻にして（jaṭā）荷を担う（bhābhārabharita）ケーニヤ（Keniya）という者が仏を供養（āhuta）に招待した（nimantita）。セーラ（Sela）バラモンが螺髻にして荷物を担うケーニヤという苦行者（jaṭābhābhārabharitaṃ Keniyaṃ nāma tāpasaṃ）が供物を準備しているのを見て（paṭiyattāhutaṃ disvā）、嫁取りがあるのか、嫁入りがあるのか、王を招待した（āvāho vā vivāho vā rājā vā te nimantito）のかと問うた。*Apadāna* 003-040-389（p.316）

〈5〉雪山のそばにアノーマ（Anoma）という山があり、そのアーシュラマ（assama）の草庵（paṇṇasālā）に私〔Upasīva〕は住んでいた。大威力有り心静かに定を得た仙人たちも（mahānubhāvā isayo santacittā samāhitā）すべて水瓶を持ち、鹿皮の上衣を着て（ajinuttaravāsin）、螺髻（jaṭā）にして、荷を担って（bhābhārabharitā）私の庵に住んだ。*Apadāna* 003-041-402（p.345）

〈6〉雪山から遠くないパドゥマ（Paduma）という山のアーシュラマ（assama）に私〔Udena〕は草庵（paṇṇasālā）を作って住んだ。８万４千の苦行者（tapassin）であり梵行者（brahmacārin）である仙人たちは（isayo）そこに集まった（tattha samāgatā）。螺髻（jaṭā）にして荷を担い（bhārabharita）、鹿皮の上衣（ajinuttaravāsin）を着た者は、片方の肩に鹿皮をかけて（ekaṃsaṃ ajinaṃ katvā）、根や果実を食べて一緒に住んだ。そのときパドゥムッタラ（Padumuttara）仏が世に出られたので、彼らとともに挨拶した。*Apadāna* 003-041-407（p.362）

〈7〉チャンダバーガー（Candabhāgā）河の岸辺に私〔Ekachattiya〕のアーシュラマ（assama）の草庵（paṇṇasālā）はあった。螺髻（jaṭā）にして荷を担い（bhārabharita）、鹿皮の上衣を着け（ajinuttaravāsin）、樹皮の衣を着た（vākacīradharā）人たちと一緒であった。彼らは爪や腋毛を伸ばし（parūḷha-kaccha-nakha-loma）、歯は汚く（paṅkadanta）、頭を不潔にし（rajassira）、全身は塵や泥にまみれていた（rajojalladharā）。全ては私のアーシュラマに住んだ（sabbe vasanti mama assame）。一人の弟子は真言（manta）や六支（chalaṅga）や相（lakkhaṇa）を学ぼうとした。*Apadāna* 003-042-409（p.367）

〈8〉その時私〔Ekadhammasavanīya〕は螺髻（jaṭila）にした激しい苦行者（uggatāpana）であった。樹皮の衣（vākacīra）をなびかせて空中を行った。*Apadāna* 003-043-424（p.384）

〈9〉私〔Buddhasaññaka〕は（ヴェーダの）読誦者（ajjhāyaka）であり、真言を持し（mantadhara）、三ヴェーダに通じていた（tiṇṇaṃ vedānaṃpāragū）。そのとき弟子たちは川の流れのごとくに私のところにやって来た（nadīsotapaṭibhāgā sissā āyanti me tadā）。その時釈迦牟尼仏が世に出られたと聞いて、鹿皮の衣（ajina）と樹皮の衣（vākacīra）をつけ、水瓶（kamaṇḍalu）を持ってアーシュラマ（assama）より出て、螺髻（jaṭā）にして荷物を担った（bhārabharita）弟子たちをつれて山麓を出た（nikkhamuṃ pavanā）。*Apadāna* 003-049-479（p.419）

〈10〉そのとき私〔Puḷinuppādaka〕は螺髻（jaṭā）にして荷を担い（bhārena bharito）、水瓶を持つ（kamaṇḍaludharo）デーヴァラ（Devala）という苦行者（tāpasa）であり、アーシュラマ（assama）は雪山にあった。弟子が８万４千人いた。*Apadāna* 003-049-484（p.426）

〈11〉雪山の近くにサマンガ（Samaṅga）という山があり、私〔Puḷinathūpiya〕のアーシュラマ（assama）はよく作られ、草庵（paṇṇasālā）はよく調えられていた。私の名はナーラダ（Nārada）といい、螺髻（jaṭila）の厳しい苦行者（uggatāpana）で、４万人の弟子たちが（sissā）私に従っていた。*Apadāna* 003-050-495（p.437）

〈12〉スメーダ（Sumedha）と名づけるバラモンは雪山から遠くないダンマカ

（Dhammaka）という山のアーシュラマ（assama）の草庵（paṇṇasālā）に住んだ。しかしその後草庵を捨てて樹下（rukkhamūla）に住むようになった。蒔いたり（vāpita）植えたり（ropita）した穀物は避け、転がった果実を食べた（pavattaphalaṃ ādiyiṃ）。ディーパンカラ（Dīpaṅkara）仏が来られたとき、髪と樹皮衣（vākacīra）と獣皮衣（cammaka）を泥の上に敷いてうつ伏せになった。仏は「この厳しい苦行を行う螺髻にした者（tāpasaṃ jaṭilaṃ uggatāpanaṃ）を見よ、無量劫の後に仏になるであろう」と授記された。*Buddhavaṃsa* 02‘Dīpaṅkarabuddhavaṃsa’（p.006）

〈13〉螺髻の（jaṭila）厳しい苦行者（uggatāpana）であった私は、仏と僧衆に飲食物をもって饗応した（annapānena tappeti）。*Buddhavaṃsa* 10‘Nāradabuddhavaṃsa’（p.047）

〈14〉その時３万８千人の大いなる仙人が（mahesinaṃ）集まった。そのとき私は螺髻の（jaṭila）厳しい苦行者（uggatāpana）であった。*Buddhavaṃsa* 15‘Attadassi-buddhavaṃsa’（p.062）

〈15〉そのとき私は厳しい苦行を行う螺髻にした者（tāpasaṃ jaṭilaṃ uggatāpanaṃ）であった。*Buddhavaṃsa* 17‘Siddhatthabuddhavaṃsa’（p.068）

〈16〉世尊の説法を聞くとバラモンの心は解脱した。阿羅漢果を得るや鹿皮の衣（ajina）、螺髻（jaṭā）、樹皮の衣（vākacīra）、三杖（ti-daṇḍaka）、曼荼羅、髪、髭は消え去った（kesā ca massū ca antarahitā）。禿頭の袈裟の衣を着け（bhaṇḍukāsāya-vatthavasana）、大衣・鉢・衣を着けた（saṅghāṭi-patta-cīvara-dhara）比丘となり、……。*Cullaniddesa*（p.032）

〈17〉仙人（isi）とは仙人という名のある者（isināmaka）である。すなわち仙人として出家した（isipabbajjaṃ pabbajitā）あらゆる仙人であって、アージーヴィカ（ājīvaka）、ニガンタ（nigaṇṭha）、螺髻にした者（jaṭila）、苦行者（tāpasa）である。*Cullaniddesa*（p.051）

〈18〉牟尼（muni）とは牟尼と名づけられるアージーヴィカ、ニガンタ、螺髻にした者、苦行者である（munināmakā ājīvakā nigaṇṭhā jaṭilā tāpasā）。*Cullaniddesa*（p.142）

〈19〉スメーダは雪山地方にあるダンマカ（Dhammaka）という山の近くのアーシュラマ（assama）に草庵（paṇṇasālā）を作り、12 種の徳を備えた樹皮の衣を（dvādasa-guṇasamannāgataṃ vākacīvaraṃ）着けて仙人として出家した（isipabbajjaṃ pabbaji）。その後草庵を捨てて樹下（rukkhamūlaṃ）に行って、穀類を全て捨てて転がった果実を食べ（sabbaṃ dhaññavikataṃ pahāya pavattaphalabhojano）、坐ったり立ったり経行したりして過ごした。ディーパンカラ仏は授記して、厳しい苦行を行う螺髻にした者（tāpasaṃ jaṭilaṃ uggatāpanaṃ）を見よ、無量劫の先に仏となるだろう〈偈〉と言った。*Jātaka*‘Nidānakathā’（vol. I　p.006）

〈20〉カーラデーヴァラ（Kāḷadevala　アシタ仙人）は苦行者（tāpasa）の螺髻にした者（jaṭā）であった。*Jātaka*‘Nidānakathā’（vol. I　p.054）

〈21〉大富豪のバラモンの家に生まれられた菩薩は仙人として出家して（isipabbajjaṃ pabbajitvā）雪山地方に住んでいた。あるとき彼は雪山を下ってバーラーナシーにやって来て、赤い樹皮の衣を下と上に着（rattavākamayaṃ nivāsanapārupanaṃ sanṭha-

petvā）、一方の肩には鹿皮の衣をかけ（ajinaṃ ekasmiṃ aṃse katvā）、髪を束ねて輪とし（jaṭāmaṇḍalaṃ bandhitvā）、1カーリ量の荷物を担う天秤棒を携えて（khāri - kājaṃ ādāya）托鉢した。*Jātaka* 066‘Mudulakkhaṇa-j.’（vol. I p.304）

〈22〉世尊は舎衛城で雨安居を過ごされてからバッダヴァティカー（Bhaddavatikā）という町に着かれると、町の人々はアンバティッタ（Ambatittha　マンゴー樹の渡し場）の螺髻にした者のアーシュラマ（jaṭilassama）には毒龍（nāga āsīvisa）が住んでいるので行かれるなと忠告した。*Jātaka* 081‘Surāpāna-j.’（vol. I p.360）

〈23〉ある村に偽の螺髻にした者（kūṭajaṭila）、騙りの苦行者（kuhakatāpasa）が住んでいた。ある家主が林の中に草庵（paṇṇasālā）を作って住まわせた。*Jātaka* 089‘Kuhaka-j.’（vol. I p.375）

〈24〉一人の五通を得た厳しい苦行を行う苦行者（pañcābhiñño uggatapo tāpaso）が国境の村に近い阿蘭若にある草庵（paṇṇasālā）に住んでいた。彼が去った後に偽善者の苦行者（kūṭatāpaso）が来て、そこに住むようになった。偽善者であることが露顕して、蜥蜴であった菩薩は「愚かなものよ、螺髻が何になろう。鹿皮の衣が何になろう（kin te jaṭāhi, kin te ajinasāṭiyā）。……」〈偈〉と唱えられた。*Jātaka* 138‘Godha-j.’（vol. I p.480）

〈25〉これは螺髻梵にした者（jaṭila）たちが行う火の供犠（aggijuhana）に対して、邪な苦行（micchātapa）には利益がない（na vaḍḍhi nāma atthi）ことを話されたものである。（現在の話）　*Jātaka* 162‘Santhava-j.’（vol. II p.043）

〈26〉むかし菩薩（現世の話を考慮すれば螺髻梵志）はバラモンの家に生まれられた。彼は16歳になったとき家族生活に意味を見いださず（na me gharāvāsena attho）、生まれたときから灯してきた火を取って森の中の草庵（paṇṇasālā）に住み、火に仕えた。しかし事故があって草庵を焼いてしまった。（過去の話）　*Jātaka* 162‘Santhava-j.’（vol. II p.043）

〈27〉菩薩は富裕なバラモンの家に生まれ、家庭生活をしてから親族を捨てて（pariccajitvā）雪山地方に行って、草庵（paṇṇasālā）を作って（māpetvā）、落ち穂を拾い（uñchācariyāya）、森の中の木の根やさまざまの果物等を食して生活した（vanamūlaphalāphalādīhi yāpeti）。そして神通と禅定を得てからバーラーナシーに遊行した。午前中に螺髻して鹿皮の衣をまとって（jaṭājinavakkalāni saṇṭhapetvā）、托鉢の器（bhikkhā-bhājana）を携えて都の中に入った。*Jātaka* 251‘Saṃkappa-j.’（vol. II p.272）

〈28〉愚者よ、螺髻（jaṭā）と鹿皮の衣（ajinasāṭī）はあなたに何の用があるか。〈偈〉*Jātaka* 325‘Godha-j.’（vol. III p.085）

〈29〉むかし虚偽の螺髻にした者（kūṭajaṭila）があって、バーラーナシーの河岸のマンゴーの林に草庵（paṇṇasālā）を造り（māpetvā）、マンゴー園の番をしながら、落ちた菴羅果の熟したものを食べて（patitāni ambapakkāni khādanto）生活していた。*Jātaka* 344‘Ambacora-j.’（vol. III p.137）

〈30〉むかし白旗というバラモンの家系に生まれた者があり、その生まれを大変自慢していた。彼は苦行者を見て彼のもとで出家し（tāpase disvā tesaṃ santike pabbajitvā）、

苦行者（tāpasa）になって、弟子たちに聖典の読誦（mante sajjhāyatha）・蹲踞の行（ukkuṭikappadhānam anuyuñjatha）・潜水の行（udakogāhanakammaṃ karotha）・飛躍の行（vaggulivataṃ）などをさせて、王の尊敬を得ようとして草庵（paṇṇasālā）で待っていた。そして王に対して「粗い鹿皮の衣をまとい（kharājinā）、螺髻（jaṭila）にし、歯は汚れ（paṃkadantā）、顔も汚くして（dummukkharūpā）、これらの真言を誦す。世人もこのような修行をしなさい」〈偈〉と唱えた。 *Jātaka* 377 ‘Setaketu-j.’（vol.Ⅲ p.232）

〈31〉司祭官（purohita）の子の迦葉は雪山に入って仙人として出家して（isipabbajjaṃ pabbajitvā）、落ち穂などを拾って生活していた（uñchācariyāya yāpento vihāsi）。彼は五官の欲を断ち苦行をして（parimāritindriyo ghoratapo tāpaso ahosi）、多毛迦葉（Lomasakassapa）と呼ばれるようになった。帝釈天が自分の地位を脅かされるのを恐れて一計を案じ、供犠を行う（yaññaṃ yajāpetvā）ように仕向けた。吉祥なる象の首を刎ねよう（maṅgalahatthiṃ gīvāya paharissāmi）としたとき、その叫び声を聞いて馬や牛が恐怖の叫びをあげた。迦葉は自分も悲しくなって自身の螺髻を眺めた（attano jaṭādīni olokesi）。螺髻や髭や胸や腹の毛が目に入った（ath' assa jaṭā massu kucchilomāni uralomāni pākaṭāni ahesuṃ）。彼は後悔した。*Jātaka* 433 ‘Loma- sakassapa-j.’（vol.Ⅲ p.514）

〈32〉（螺髻梵志とはされていない。ただし昔の提婆達多として jaṭila が出る。おそらく本文中の師匠も螺髻梵志として把握されていたものと考えられる。）むかしバーラーナシーの都に有名な師匠（ācariya）があった。500 人の若いバラモンに学問を教えていたが、ここに住んでいては十分な教育ができないと考えて、ゴマ・白米・油・着物などをもって雪山地方の阿蘭若に入り、大道からあまり離れていないところに（maggato avidūraṭṭhāne）草庵（paṇṇasālā）を立てさせた（karetvā）。若いバラモンたちも各自の草庵を立てた（māṇavāpi attano attano paṇṇāsālaṃ kariṃsu）。その地方の人々は米や牛乳を搾るための乳牛を贈った。*Jātaka* 438‘Tittira-j.’（vol.Ⅲ p.537）

〈33〉（これは悪口として言われたものである。）上唇突き出て、不潔な歯をして頭は汚れている螺髻にした者たち（dīghuttaroṭṭhā jaṭilā paṃkadantā rajassirā）。〈偈〉 *Jātaka* 469‘Mahākaṇha-j.’（vol.Ⅳ p.184）

〈34〉司祭と遊女の間に生まれたウッダーラカ（Uddālaka）は、苦行者たちの集団（tāpasagaṇa）のもとで出家して（pabbajitvā）、蹲踞したり（ukkuṭikappadhāna）、棘の床に伏したり（kaṇṭakapassayika）、五熱苦行（pañcatapa）を行ったりした。後に彼らは集まって（te sannipatitvā）、ウッダーラカに阿闍梨の地位を贈った（ācariyaṭṭhānaṃ adaṃsu）。彼らは森の根と果実を食べて（vanamūlaphalāhāra）、阿蘭若に住した。王がウッダーラカに尋ねた。「粗い鹿皮の衣を着て（kharājinā）、螺にし（jaṭilā）、歯汚れ、顔も汚くして（paṃkadantā dummukharūpā）、真言を誦す（japanti）。彼らは悪趣を脱しているのでしょうか」〈偈〉と。ウッダーラカは「バラモンは常に火を取り（aggiṃ ādāya）、水を注ぎ、供犠し（yaja）、祭柱を建てる（usseti yūpaṃ）。このように行じる者こそバラモンだ」〈偈〉と唱えた。*Jātaka* 487 ‘Uddālaka-j.’（vol.Ⅳ p.297）

〈35〉菩薩はよい家柄のバラモンの家に生まれ、成人してから出家して（nikkhamitvā）髪を円形にし（jaṭāmaṇḍala）、マガダなどの３つの国の間にある森（Magadha-raṭṭhādīnaṃ tiṇṇaṃ raṭṭhānaṃ antare aṭavī）に入ってアーシュラマを造って住んでいた（assamaṃ katvā vāsaṃ kappesi）。鳩などの４匹は時々仙人（isi）のところに行って説法を聞いた。*Jātaka* 490‘Pañcū- posatha-j.’（vol.Ⅳ p.325）

〈36〉虎の王が Bārāṇasī の近くの阿蘭若の偽の螺髻にした者のアーシュラマ（kūṭajaṭilassa assama）に住んでいた。*Jātaka* 492‘Tacchasūkara-j.’（vol.Ⅳ p.346）

〈37〉螺髻（jaṭā）にして鹿皮の衣をつけ（kesā ajināni vatthā）、髭は伸びるまま、されど螺髻も、獣皮も智慧なき者を守りえない。〈偈〉 *Jātaka* 497‘Mātaṅga-j.’（vol. Ⅳ p.387）

〈38〉菩薩は司祭のバラモンの子に生まれ弓の名人になった。彼は仙人として出家しよう（isipabbajjaṃ pabbajituṃ）とした。それを知った帝釈天はゴーダーヴァリー（Go-dhāvarī）の河岸のカヴィッタ（Kaviṭṭha）林（vana）の中のアーシュラマ（assama）に出家の道具を用意した。菩薩は草庵（paṇṇasālā）を見て、赤い樹皮衣を内に着、上に着て（rattavākacīraṃ nivāsetvā ca pārupitvā）、鹿皮の衣を一方の肩につけ（ajinacammaṃ ekaṃsagataṃ akāsi）、髪を束ねて輪とし（jaṭāmaṇḍalaṃ bandhitvā）、１カーリ量の荷物を担う天秤棒を肩にかつぎ（khārikājaṃ aṃse katvā ）、歩杖を携えた（kattaradaṇḍaṃ gahetvā）。その後多くの仙人が出家して、そのアーシュラマは仙人たちの集団（isigaṇa）で狭くなったので、仙人たちを方々に遣ってそこに住まわせた。最後には５ヶ所に数千の仙人たちの集団（isigaṇa）ができた。*Jātaka* 522‘Sarabhaṅga-j.’（vol.Ⅴ p.125）

〈39〉菩薩は西北出身のバラモンの大家に生まれ、成人に達してから仙人として出家した（isipabbajjaṃ pabbajitvā）。１匹の牝鹿（migā）との間に子が生まれ、彼をイシシンガ（Isisiṅga　一角仙人）と名づけた。彼の息子は苦行厳しく諸根が働きを失った（ghoratapo parimāritindriyo ahosi）。彼は雪山地方（Himavantapadesa）のアーシュラマ（assama）に住み、樹皮の衣を着ていた（vākacīraṃ pārupitvā）。誑かされてカーシ国の王女と男女の交い（methunasaṃsagga）を行い禅定を失った。（ここには Isisiṅga が螺髻にしていたという文章はない。しかし王女の jaṭā について言及し、これを自分のものと比較しているような文章があるので資料の中に含めた。）*Jātaka* 526‘Naḷinikā-j.’（vol.Ⅴ p.193）

〈40〉菩薩は富裕なバラモンの息子として生まれた。彼は両親（mātāpitaro）と弟と一緒に出家して（pabbajitvā）、雪山地方にある５種の蓮華に覆われた池の近くの美しい森に（Himavantapadese pañcapadumasañchannaṃ saraṃ nissāya ramaṇīye vanasaṇḍe）アーシュラマ（assama）を作って（māpetvā）住んだ。２人の息子は両親に孝養を尽くし、草庵（paṇṇasālā）を掃除したり、森からおいしい樹果（madhuraphala）を取ってきたり、螺髻を清浄にしたり（jaṭā sodhenti）した。しかし弟は未熟な果実や半熟の果実（apakkaduppakkāni phalāphalāni）を取ってきて両親に食べさせるので、それでは健康に悪いと自分はおいしいよく熟した果実を（madhurāni supakkāni）差し上げた。*Jātaka* 532‘Sona-Nanda-j.’（vol.Ⅴ p.312）

〈41〉螺髻（jaṭā）と鹿皮の衣を着けたコーシヤ（Kosiya）は（この部分は〈偈〉）、雪山の南側のガンガー河と自然にできた湖水の間の（gaṅgāya ceva ekassa jātasarassa ante）アーシュラマ（assama）に草庵（paṇṇasālā）を作って出家して（pabbajitvā）、森の根と果実を食べて（vanamūlaphalāhāra）住んでいた。*Jātaka* 535 ‘Sudhābhojana-j.’（vol.V p.407）

〈42〉テーミヤ（Temiya）王子を出家させようとして（pabbajitukāmo）、帝釈天は3由旬もある深い森の中に（tiyojanike vanasaṇḍe）アーシュラマ（assama）を建て（māpetvā）、出家に必要な一切のものを作った。菩薩は草庵（paṇṇasālā）の中に入って、赤い樹皮の衣を（rattavākacīraṃ）下に着（nivāsetvā）、上に着て（pārupitvā）、一方の肩には鹿皮の衣を着け（pārupitvā ajinaṃ ekaṃsaṃ）、髪を円形に結び（katvā jaṭāmaṇḍalaṃ）、肩には天秤棒を持ち（bandhitvā kācaṃ aṃse katvā）、歩杖を取って（kattaradaṇḍaṃ ādāya）出てきた。*Jātaka* 538‘Mūgapakkha-j.’（vol.VI p.021）

〈43〉ドゥクーラ賢者（Dukūlapaṇḍita）は16歳になったときに、ヒマラヤ山中のミガサンマター（Migasammatā）河から半クローシャ離れた所にあるアーシュラマ（assama）の草庵（paṇṇasālā）に入って、赤い樹皮の衣（rattavākacīvara）を内に着（nivāsetvā）、上に着（pārupitvā）、鹿皮の衣を肩にかけて（ajinaṃ aṃse katvā）、髪を束ねて輪として（jaṭāmaṇḍalaṃ bandhitvā）仙人（isi）の姿になり、パーリー（Pārī）〔という女性〕も出家させて（pabbajjaṃ datvā）、欲界の慈悲を修しながら2人で住んだ（ubho kāmāvacaramettaṃ bhāventā tattha paṭivasiṃsu）。*Jātaka* 540‘Sāma-j.’（vol. VI p.073）

〈44〉粗き鹿皮の衣を着て（kharājino）、螺髻にして（jaṭī）、身は穢れ（rummī）、……。〈偈〉 *Jātaka* 543‘Bhūridatta-j’（vol.VI p.194）

〈45〉大那羅陀という梵天であった菩薩は出家者（pabbajita）となり、髪を束ねて輪とし（jaṭāmaṇḍalaṃ bandhitvā）、螺髻の間には黄金の針を刺し（jaṭantare kañcanasūciṃ odahitvā）、身体には内も上も赤い樹皮の衣を着（antorattaṃ uparirattaṃ cīrakaṃ nivāsetvā）、白銀で仕上げた鹿皮の衣を片方の肩にかけ（rajatamayaṃ ajinacammaṃ ekaṃsagataṃ）、黄金造りの鉢を持ち（suvaṇṇamaya bhikkhā-bhājana）、3ヶ所に湾曲のある黄金の天秤棒を肩に担い（tīsu ṭhāṇesu vaṃkagataṃ suvaṇṇakācaṃ khandhe katvā）、真珠の紐で珊瑚の水瓶（pavāḷa-kamaṇḍalu）を持つ仙人の姿（isivesa）になった。*Jātaka* 544‘Mahānāradakassapa-j.’（vol.VI p242）

〈46〉クシャトリヤであるヴェッサンタラ（Vessantara）王子は妻と2人の子を連れて出家して（pabbajitvā）、ヴァンカ（Vaṃka）山中のアーシュラマ（assama）の草庵（paṇṇasālā）に仙人の衣（isivesa）、苦行者の衣（yāpasavesa）を着け、森の根と果実を採り（vanamūlaphalāphalāni ādāya）、子供たちを沐浴させ（nahāpeti）、杖を取って経行した（kattaradaṇḍa）。彼らを人々は褒めて歌った。「彼はバラモンとなって、鉤火ばしを持ち、螺髻にし、皮の衣を着て、地上に坐り、火神を祀るであろう（dhārento brāhmaṇaṃ vaṇṇaṃ āsadañ ca masañ ca jaṭaṃ, cammāvāsī chamā seti jātavedaṃ namassati）」〈偈〉と。*Jātaka* 547‘Vessantara-j.’（vol.VI p528）

〈47〉もし事火外道有りて来りて出家を求むれば、応に彼に度を与え、及び近圓を授くべし。

何を以ての故に。此の事火の種類は三種業を信ず。何等をか三と為す。所謂有業と及び所作業と作因業なり。是の故に応に度すべし。『根本有部律』「出家事」（大正 23 p.1032 上）

〈48〉此等の仙人は皆な是れ異學なり。我應に彼所學の伽他を頌して彼の聞く者をして悉く皆歡喜せしむべし。是の念を作し已りて、便ち伽他を説いて曰く。

露形と長髮　塗灰ならびに斷食　地臥と澡浴身　蹲踞と及び邪念　此等の諸の邪法は終に生死を免れず　唯だ眞妙を除く　法にして自身を莊嚴し　正見にして思惟に住し當に貪瞋等を斷ずべし　慈悲行と喜と捨と　有情の命斷ぜざると　學處を勤修すると此は是れ眞の沙門にして　亦た是れ婆羅門なり　是れ苾芻性にあらず。

『根本有部律』「出家事」（大正 23　p.1036 中）

〈49〉時に天帝は與えて太子の螺髻中に寶珠を戴せ已る。太子は天の如く形貌端嚴にして七寶を獲具す。『根本有部律』「薬事」（大正 24　p.058 上）

〈50〉爾の時佛は諸苾芻に告げて曰く。是の義に由るが故に今より已去。應に輒ち外道を度し出家并びに近圓を受けしむるべからず。釈迦種及び事火留髻外道を除く。『根本有部律』「雑事」（大正 24　p.398 下）